
-歴史の改編者-

妄想男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- 歴史の改編者 -

【Nコード】

N6463U

【作者名】

妄想男

【あらすじ】

作者の妄想を元に展開する独自設定の作品です。

原作を好きな方には不満多き作品と思われるので、「別の物」と捉えてお読み下さい。

ガンダムシリーズの「1年戦争」を元に書いた、主人公最強系転生チート物です。

原作や登場する兵器類の設定が独自設定に変更等がありますのでご容赦を…。

間違いや誤字・脱字の指摘は勿論、意見等もお待ちしております！

この作品の設定を載せた「-独自設定-」は変更次第、新規掲載（入れ替え？）をします。

ただ、ネタバレがあったり変更になったりしますので、参考や予定程度と考えてご了承頂きます！

更新は月1（毎月15日のみの更新）予定ですので、亀更新がベスになります。

年齢制限は無しですが、残酷な描写はするつもりなのでとりえず最低限の意味で「R-15」を…。

程度は不明ですが、性的描写もリアリティーを追求したいのですつもりです。

その場合、法規等で運営に責任が及ばない様に、年齢制限はとりあえずは変えるつもりはありませんが運営から注意等が来た場合は「R-18」に変更します。

ただ、最初は年齢制限は変えずにワードとこの場で注意及び警告をします。

「注意及び警告」：この作品には残酷な描写・性的な描写が含まれる可能性がありますので、お読みになる際は自己責任でお願い致します。

「R-〇」の条件に入る方はお読みになる事を注意及び警告します。

前記した通り、万が一にお読みになった方がいた場合、及び登場する地名や人名等は作者が考えた設定や原作からの設定を使用しただけですので運営には責任が無い物とします。
又、人名や地名等の多くの設定は架空の物なのでこれによる責任は運営・作者に責任が無い物とします。

それに合わせ、この作品の基本的な設定は原作から来ていますが、関係事態はありますので、当然原作やその関係にも責任がありますので、お読みになるのは自己責任とします。

設定等の説明は変更・更新する可能性がありますので、その説明がある前書き部分に加筆・変更日を記載します。

タイトルを変更。

あらすじを説明用に変更しました。(2011/7/12)

(あらすじでの内容は今後も変化する予定です同年7/12)

・独自設定・（前書き）

2011/7/12作成・掲載

- 独自設定 -

- M Sを始め、兵器類の登場時期や設定が変更されているのがあります。
-

例としては

ドラッツェがジオンと協力開発して民間企業の護衛機として販売しているM S。

これにより本来の登場時期より早く登場し、更に扱いや生産数も違う。

地球連邦軍が開発したボール系を、ジオンとの協力開発したドラッツェもですが地球連邦はM Sの普及と共にその利権を「ネオン独立国」に譲渡、と変更。

他にはM S等の民間に販売された事から、犯罪率が増加。

(宇宙海賊化等)

譲渡の理由は「ネオン独立国」の戦力弱体化を狙った物ですが、裏目に出た設定です。

因みに、宇宙海賊の中には当然、他の反連邦組織も含まれます。

- 勢力図 -

地球連邦は当然ですが、この作品ではジオン公国(てかザビ家)も独立を無事、果たして残っています。

(一部、ジオンから離れた人物はいますが)

他の勢力としては、L5を起点にしたS1・4を支配領土した「ネオン独立国」。

ラグラージュポイント
MSや艦等が民間向けに販売された事によって装備を強化した反連邦組織、傭兵（企業、組織、個人…等）、犯罪組織（宇宙海賊等）…等ですかね？

他には地球で（脱退等で）独立したオーストリア国、ハワイ…等です。

- MSの扱い -

これに関しては最初に記載した通り、公式・非公式問わず、設定を
が変更したされたのがありますので、ご容赦下さい。

- アムロ親子等に関して -

この作品ではサイド6もジオンの支配下に入るので、中立コロニーはL3付近のサイド7・8の2つを最初の中立コロニーにしました。

ただ、それだと色々…特に「V作戦」関係が八チャメチャになりますので、サイド6からは残念ながら戦争を嫌う居住者が多い、と言う設定で制圧したジオン公国に抗議が殺到、仕方なくジオン公国はゴースト等との関係上、サイド6はやや遅れて中立を達成、それ以外は原作と同じく「V作戦」発祥の地、となります。

（発祥の地ってのはおかしいですかね？）

プロローグ

おっす、唐突だけど俺は死んだ。

えっ？

今、話してるだろ？

チツチツチツ、これは神様？って奴に転生させて貰ったんだよ。

何でも間違って殺したらしいから、ちょっと整形してあげたらお礼に転生させてくれるってさ！

場所？

…死亡フラグ満載の「機動戦士ガンダム」の世界だってよ。

まあ、何か他にも転生した奴がいるらしいが、俺は別の時空？らしいから、居ないらしい。

まあ、どちらにしる自由にさせて貰うぜ！

そいつの出したってか貰った力は判らないけど（教え無い約束らしくてな）、俺も幾つかの力・チート・を貰った。

・全てのガンダム世界の技術

・全ての兵器（艦やMSとか）の操作技術の経験

・予め、転生先には俺用の隠し基地ってか拠点の用意、それと軽巡

洋艦△サイを1隻、MSではザク2のS型1機とF型を2機、予め準備して貰った。

・容姿をFFのセフィロスの若い(24位)にして貰い、身長は元の自分と同じ182、それと不老不死にして貰った。

・拠点には開発区・生産区・軍事区・居住区、それと資源を保管する保管区、金塊等の資金類を保管する金庫区、後は秘密の区の全部で7つの区だ。

…まあ、他にもあるが今言つならこんな感じ？

後、さっき言つた先に転生した奴の提案で八口の提案を貰った。

実際に見たらこれは使えるチートだったから断らなかつたぜ！

それじゃあ、少しは頑張つて来るかな？

- 第1話 -

…ポコっ…

何かの施設の様な部屋に、赤ん坊が入った容器があった。その容器には液体が満たされ、赤ん坊はその液体の中で呼吸器見たいな装置を付けて浮かんでいた。

容器が設置されている機械は別の機械とコードで繋がっている。

暫く時間が経つと赤ん坊がうつすらと眼を開ける。

(…どうやら転生は完了したようだな、しかしこれは?)

赤ん坊　に生まれ変わった自分の姿にいぶかしむ。

(さて、今は何年だ? 赤ん坊なのは仕方ないが動けないな)

そんな事を考えていると機械から音が鳴り始める。

コポコポと音を出しながら液体が排出されているらしく、それに合わせて自分の体も容器の底に降りてゆく。

そして容器の底につき、中の液体が無くなる辺りで誰かが入ってきたようだ。

(…人がいる?)

自分の願いを考えると人はいない筈…と考えていると、容器の蓋の部分と思われる場所が開く。

・カシユッ・

そして誰かと思われる存在に容器から取り出される。

(あゝ、成る程な)

自分が人と思つたのは人では無かった。

それに抱かれる様に近付くと、それは神に出した条件の1つ、「ハロ」だった。

自分を抱いているハロの色は白で、気付かなかったが黒も居た様だ。

赤ん坊の状態ではボヤけて見えて、近付かないと良く見えないのだ。

「あゝ…ブ？あばばば？」

ハロに色々と聞こうとしたが上手く話せない。

赤ん坊らしい事しか口から出ないのだ。

どうしようかと考えていると、ハロ達が自分を何処かに連れて行く様だ。

(…さて、どうなる事かな?)

そんな事を思いながらハロに抱かれつつ移動する。

- 第2話 -

あれから暫く経ち4歳となった。

あれから白と黒の八口達に世話や教育をされながら生活をしていて、最近になって漸く時期が分かった。

今は宇宙世紀0055年だった。

それと白と黒の八口以外にも何種類かの八口達がいる事が分かった。

てつきりあの2体だけと思っていたからビックリした。

それぞれの色には役割が決まっているが、今は良いか、と考えて放置している。

とは言っても方針が決まる迄は資源採掘等を白と黒の八口以外の八口達に命じて置いた。

7歳になる年である宇宙世紀0062年2月、俺は地球圏の状態に改めて辟易していた。

地球連邦の腐敗は知ってはいたが改めて調べるとその酷さに胸焼けを起こす。

最初に行ったのは地球連邦関係の場所にハッキングをしたのだ。

そこで得た情報によると、連邦政府の高官の汚職や低所得者を主にコロニー住居者への重税、社会的に高い地位に居る人への賄賂による宇宙への移住の黙認…等々だ。

酷い場合には連邦政府は軍を派遣して抵抗する人達を犯罪者として

無理矢理に宇宙に移住させるのだ。

そこだけならこの件はマシで、移住先が普通のコロニーじゃなく犯罪者を収容する為のコロニーだったり、その際に見た目が綺麗な若い子は…高官等の玩具にされる始末だ、しかも飽きたり子供が出来たらコロニーや犯罪者コロニーにポイツと捨てる様に、何も持たせずに移住させるのだ。

それと色々調べ続けて分かった事だが、各コロニー群には反連邦組織があるらしい。

らしいってのは俺は知らなかったからだ。

正直、原作ではそこまで詳しいのは語られなかったし、メインの話は「木馬」柄みだったからな。

さて、そういえば俺の居る基地の場所を言って無かったな。

俺の居る基地は地球と木星の間にある宇宙ゴミで出来た場所の中の1つに、廃棄されたコロニーの様な感じである。

見た目は廃棄されたコロニーだけど、実際は空気や食糧生産区も有るし、他にも色々と施設つてか区があるから「小さなコロニー要塞」に相応しい仕様だ。

勿論、武装だつてしてある。

さて、そんな俺だがこの4年間で色々と準備は出来ていた。

と言っても万が一にバレた時の為に自衛用のMSを少しばかり生産して、艦を3つ生産しただけだ。

まあ、まだ暫くは使えないがね。

MSはジオン共和国が公国に変わってから出るから、暫くは使えない。

そしてこの宙域に基地を用意したのは、俺が手に入れたい場所が地球圏じゃなく木星圏だからだ。

木星圏は地球圏に比べたら確かに弱い。

だけど、他の場所に比べたら魅力ってか旨味は大きい。

実際、かなりの人間が暮らせる領土になるだろう。

それより、今は方針が決まった。

サイド4「ムーア」のある人物に目を付けた。

彼は小さいながら反連邦組織を率いていて、他の組織と一緒にサイド4の独立運動ってか抵抗をしている人物だ。

連邦政府も危険人物と見なしているが、宇宙の事に興味が無いのかあまり積極的では無い。

だから今の内に接触して、俺の好みに合えば組織のボスとして確立しようと考えている。

後は上手く、彗星やその妹、巨星や白狼も欲しいが…まあ、無理だろうな。

欲しい人物は何人かいるが、今は確実に自分の勢力を密かに強化しつつ、他の隠れ蓑が欲しい。

その為の反連邦組織の設立ってか支援だ。

それに勢力が複数あれば、下手に戦争は起きないだろうからな。

…結局、仮初めの平和の為に、人は睨み合わなければいけないのだ。

後は宇宙だけじゃなく、地球にも独立した勢力を2・3は作りたくな…。

「その為には色々と準備を急ぐか」

俺の物語は始まったばかりだ！

・第3話・

・宇宙世紀0063年8月・

この日、俺は基地にいるハ口達に色々と指示を出して地球圏へと向かった。

当初に予定していた民間の輸送船を装った宇宙輸送船「ミニミック」に沢山の資源を積んでサイド4へ進路を執る。

幾日かすると予定通りにサイド4のコロニーの1つに寄港した。

入った当初は艦の責任者兼所有者が7歳の若者と言う事に疑問を抱かれ、地球連邦の軍人に危うく積み荷の金塊を奪われそうになったが、艦の所有権や艦の資格の証明書を見せると名残惜しそうに引いた。

「やっぱり此処も腐っているか」

凡そ子供らしからぬ口調で軍人が消えて行った方を見る。

腐敗は知っていたが調べて、そして今のあの物欲しそうで人を見下した目が気に入らない。

「さて、早速調べるか？」

俺はそのままコロニーの中にある街を目指した。

受付やら色々な手続きを終えて手配していた車に乗って、運転手に街へ行く様に言ってやって来た。

街は思っていたよりも活気があり、小さな子供同士が遊んだり学生らしきカップルが喫茶店らしき店で話し合っていたりしている様子が見える。

「どうだい？此処も結構、いい街だろ？」

俺が外の景色を眺めていると、不意に一時的に雇った運転手が話しかけて来た。

「はい、僕がいた所よりも活気等があって羨ましいです」

「ははっ！そうだろそうだろ？俺はこのコロニーで生まれ育ったから他のコロニーはちゃんとは知らないが、それでもこのコロニーが大好きだ！」

その後も運転手とはどの店が旨いとか子供には飲むのは早いか、とかの会話を続ける。

「そういえば、この後は何処に行くんだい？」

「この後は大学に寄って、シック教授って方に勉強を見て貰う予定です」

へえ…しっかりしてるんだな、と運転手に関心されながらも車は大学に近いて行く。

「正面に付けるから待っててな」

運転手はそのまま正面口の前に車を停める。

「ありがとうございます」

「良いってよ、仕事だかな！終わるまでは駐車場に居るから、終わったら悪いんだが駐車場に来て貰えるかい？」

「分かりました」

それじゃあ…と、運転手は駐車場に向かって車を走らせた。俺はそれを見送ると大学に入って行く。

正面口に入ってすぐ右側に受付があり、そこで女の人に質問される。

「こんにちは、坊や。此処には何の用で来たのかな？」

「あの、シツク教授って方に会いたいんですが…」

「あら？教授とはどんなご関係？教授は忙しい方だから用が無いのなら会わせちゃ駄目なの」

「えっ…と、シツク教授に今日は勉強を見て貰える約束で来たんですけど…」

「残念な坊や、此処は大学だから坊やの先生はいないわよ？さあ、分かったら帰りなさい！」

正面口を指差しながら女性が帰る様に言う。

(おかしいな？確かに今日、会う様に手配したのだが…)

そう考えていると受付の内線が鳴る。

女性がシツシツと手を振りながら内線を取り会話を始めた。

仕方ないので正面口から出て、駐車場に向かおうと思ったたら女性に呼び止められた。

どうやら今頃になって教授から連絡が来たらしい。

教授のいる場所と入る許可を貰って教授の待つ場所へと向かう。

教授は3階にある個室を教授用に貸してあるらしく、そこで待っているとの事。

暫く階段を登ったりしながら歩くと、直ぐに教授の居る部屋に着く。ノックをすると部屋から返事が来たので入る。

「やあ、いらっしやい。今日は勉強を見てあげる約束だったね」

教授が約束の話を出してくる。

そして紅茶を俺と教授の分を用意して一口飲むと、

「所で君は誰何だい？」

教授が此方を睨む様に質問して来た。

- 第4話 -

教授の質問に対して暫く無言になりながら紅茶を飲む。

その間も教授の睨みは弱まる事は無く、寧ろ強くなっていく。

「もう1度だけ聞く。君は誰何だ？そして何故あの事を知っている？」

教授の質問に暫く思案する様に片手を顎に当てて考える風を装おう。そして少し考えたふりをしながら教授を見て

「まどろっこしいのは嫌いなので単刀直入に言いましょう。貴方が隠し持ってたパソコンにハッキングして、連絡を入れたのは私だ、目的は貴方と貴方が率いる組織が欲しい」

静かに、しかしはつきりと次々と最低限の事だけを教授に伝えた。教授は子供だと思っていた相手がいきなり態度が変わり、更に色々な事を言われた為か、少し硬直した。

しかし流石に反連邦組織を率いるだけあり、直ぐに復活して此方に質問をして来た。

「…君は何者だ？それにハッキングだと？一体、どうやって？」

「私の正体については秘密だが、名前位は名乗ろう。ブラッド・バレット、それが私の名前だ。ハッキングについては連邦関係をハッキングしていたら貴方の名前も犯罪者リストにあったから、そのまま調べただけだ」

「なっ…！」

ブラッドの言葉にシック教授が驚く。
それは仕方ないだろう、何故なら現状に置いて圧倒的な勢力を誇る地球連邦にハッキング等…。
幾ら腐敗して多少は緩くなったとしても、今だにその力は確かな物なのだ。
それをたかが7歳の子供が簡単に言った事やその様子から嘘とは言えない事に驚く。

「信じられないならこれを」

ブラッドがシック教授に何枚かの紙の束を渡す。
浮けとつて内容を見たシック教授の表情が直ぐに青くなって行く。

内容はシック教授を含めた各コロニーに居る、地球連邦が密かに作成した犯罪者リストやその組織、活動拠点が記載されていた。

「これは…」

「それは私がハッキングして手に入れた情報を纏めた物です。それと此方を」

今度は別の紙をシック教授に渡す。

その内容も又、驚く物だった。

内容はサイド1やサイド4があるL5とL1、L2、月の間にあるラグラージュポイント、デブリ帯に廃棄された資源採掘基地から作った秘密拠点、更にはサイド4独立の為の計画や地球連邦だけでなくジオンの情報も入っていた。

「…これは確かな情報なのだろうか？」

「ええ、少なくともハッキングした時点では本物ですよ？ただ時間は常に動いてますから、多少は変わってるかも知れませんが」

シック教授の質問にサラッと答える。

シック教授は少し考えてから。

「この計画に賛同しなかったら？」

「別に貴方に何かするつもりはありませんよ？その代わり、他のサイドで新しい人を探すだけですから」

何でも無い様に答えるブラッド、暫くシック教授は考えこんでいたが、ブラッドの方に顔を向ける。

「…分かった、賛同しよう。」

「ありがとうございます。」

「ただ、他の皆を纏めるのに1週間程の時間が欲しい」

「構いません、寧ろ私が思ったより早くて助かります。」

ブラッドは答えながら残った紅茶を飲み干す。

「しかし…何故、我々、と言うより私に協力を？」

飲み干したのを確認してからシック教授が疑問を聞く。

「別に難しい事じゃありませんよ？そのリストに書いてあるのを頼りに、自分なりに調べて、信頼出来るだけの人格・能力が貴方だった…それだけです」

シック教授が何かを言おうとするが、それに…とブラッドが続ける。

「私の両親は強制的に移住をさせられました。…その後は無理に働き続けてどちらも死にました、私のは言わば、個人的な私怨ですよ」

「…そうか」

その後は多少の雑談はしつつも、2人は色々な確認を行い、別れる。

翌日、シック教授は突然、大学を辞め姿を消した。

それから5日後にサイド4のコロニーの1つで武装決起が勃発。

武装決起を起こしたグループは地球連邦軍の関係施設を次々と破壊、その後はコロニーに停めてあった地球連邦軍の戦艦や輸送船を強奪、何処かへ姿を眩ませた。

地球連邦軍はこの事態に軍を派遣、しかし犯人達を捕まえる所か、犯人の姿を捉える事が出来なかった。

後日、開かれた会見では武装決起した犯罪グループは無事に鎮圧したと発表がされた。

この会見の後、事件があったコロニーから1隻の輸送船がサイド3に向かって飛びたった。

- 第5話 -

- 宇宙世紀0068年 -

この年、宇宙に衝撃が走った。

宇宙世紀0058年にジオン共和国が独立を果たすのに貢献、そしてそのリーダーでもあったジオン・ズム・ダイクンが突然の死を迎えたのだ。

彼はコロニーへの宇宙移民が始まって半世紀以上が経ち、地球にとどまる特権を持つ人々とスペースノイドと呼ばれる宇宙移民の間で対立が深まる中、「スペースノイドからこそ新人類『ニュータイプ』[『]が生れる」と説き、地球からの自治権獲得を訴えて多くのスペースノイドから大きな支持を得た人物である。彼は地球を自然のままそつとしておくべきとする「地球聖地論^{エレスム}」と、宇宙生活で独特の視野を得た宇宙生活者の自治権確立をうたう「コントリズム」を融合した思想（後に「ジオニズム」と呼ばれる）を唱えて、サイド3で政治活動を行う。

やがてその運動はサイド3全域に広がり、宇宙世紀0058年に単独での自給自足が可能となった時点でジオン共和国の成立が宣言され、同時にジオン国防隊を設立させた。

宇宙世紀0059年、地球連邦政府はジオン共和国に経済制裁を実施し、両者の対立は深まっていった。

対立が深まった理由としては、サイド3は主な産業は製造業で地球連邦向けの輸出で潤う一方、資源は不足しており資源開発に多大な投資を行ってきた。

宇宙世紀0034年には資源枯渇による急激なインフレが発生し、翌0035年には通貨危機が発生。

0042年には工業生産力がピーク時から4割低下し、混乱した国

民が強い指導者を求めた。

そこにダイクンを筆頭にザビ家等の活躍で奇跡的に経済は持ち直すが国民の資源枯渇に対する恐怖は、以後、サイド3に住む人々にずっと根付く事となる。

そしてダイクン亡き後に後を継いだのは、ダイクンの側近であったデギン・ソド・ザビであった。

この事にダイクン派と呼ばれるグループが抗議、その抗議は日に日に増し、内乱かと思われる状況の中、突然ダイクン派のグループがザビ家やザビ派と和解、その翌0069年にダイクンの妻であるアストライアが亡き夫の後事を任せると発表、更にダイクン派の筆頭だったジンバ・ラルがデギンの指示を表明した。

その後、デギンは着々と政治体制を整える。

そして翌0070年に共和国から公国に国名を変更、同時に民主制から君主制に変更し自らは「公王」に即位した。

その間にアストライアか自分の子供2人、そしてジンバやその息子ランバ等のダイクン派の何名かを連れて他に移住した。

公国となったジオンは同年8月に地球連邦と独立の為の話し合いが月にて行われ、色々な取り決めを行い、地球連邦政府はジオン公国のサイド3の全自治権を認め、名実共に独立を果たしたのである。

更に、ジオン公国は地球連邦政府と交渉を続け、地球から見て月の裏側の広い範囲、実に月の40%にあたる場所をジオン公国の領土として領土権を承認、ジオン公国は月に資源採掘基地の建設を開始した。

尚、余談ではあるがジオンが公国になった日にカロウィン・シックに似た姿をサイド3で見たと言う話が囁かれた。

- 第6話 -

- 宇宙世紀0072年5月 -

サイド4とサイド3の中間エリアにあるデブリ帯付近に、ジオン公国の艦隊が集結していた。

「閣下、本当に奴等は現れるのでしょうか？」

艦隊にある1つの艦で1人の男が自分の乗る船の閣下と読んだ男に疑問をぶつける。

疑問をぶつけられた - 通常の成人男性よりも巨体な - 男は、部下である男を見ずにモニターを見たまま答える。

「…分かん。しかし兄貴の命令だ、上手くやるしかあるまい」

「了解しました、ドズル閣下！」

ドズルと呼ばれた男は、艦長や通信手らに指示を出しモニターを見つめる。

ドズル…名前はドズル・ザビと言い、デギンの三男である。

彼は長兄であるギレンからある物を積んだ輸送船を含む、艦隊の指揮を任されてこのエリアにまで来たのだ。

ただ、彼自身は今回の指示は不服だった。

何故なら輸送船の積み荷はジオン公国の新兵器であるからだ。

それを今から会う相手側に秘密裏に譲渡する交渉だからだ。

せめての救いは積み荷の全部がそれじゃなく、一部とは言え新兵器

の競合に落ちた兵器も含む事だろうか。

「目標地点へ到着しました！」

不意に通信手から報告が入る。

「よし、艦隊はこの場で停止！交渉役は相手側が現れたら向かえ
！」

ドズルの言葉に艦長が指示を出し、通信手は他の艦にその指示を伝える。

艦隊が停まる頃、デブリ帯から数隻の艦が現れたら。
見た所、地球連邦軍の戦艦が3に輸送船が2、だ。

ただ、その船達からは地球連邦の信号は出ておらず、代わりに他の信号が出ていた。

「…閣下、例の相手の確認が取れたとの事です」

艦長がドズルに報告する。

それを聞いたドズルはすぐに相手に話し合いを申し出た。

相手はそれを了承、ドズルらジオンの指示の元、小型宇宙艇に乗って何名かが交渉の場用にした艦に乗り込んだ。

ドズルらはその様子を静かに、見守ったのだった。

「御初にお目にかかります。この度の交渉役を仰せつかりました、
コンスコンです。」

ジオン側の交渉役である男が、入って来た相手に名乗る。

「これはこれはご丁寧に、私は反連邦組織の交渉役を任されたユウキ・クリシマです」

相手側である男、ユウキもコンスコンに名乗りながら互いに握手する。

「どうぞお掛け下さい。…では早速、話し合いを始めましょう。今回、我々ジオンは貴方方と正式に…とは言っても秘密裏にですが、協力を約束しましょう。その証として我々ジオンはそちらに少数ですが、開発した新兵器の提供をしましょう！」

「ありがとうございます。我々からはそのお礼に、此方の輸送船に積んである資金・資源を僅かばかりの気持ちですが投資させて頂きたい。」

「おお！それは助かります。例え僅かでもその分、助かりますからな！」

2人はそれぞれに紙を交換し、内容を確認する。

「…互いに動くのはまだ先、ですか」

「ええ、そちらは当然ですが我々ジオンも今だに兵士達の新兵器の練度は低いですから、それと此方が以前からそちらに打診されていたツイマッド社の協力の確約した書類です」

コンスコンがユウキに別の紙を渡す。
受け取った紙の内容を確認するユウキ。

「…確かに」

「それは良かった、これで取り敢えずの話し合いは終了ですか？」

「ええ、互いに地球連邦からの鎖を断ち切りましょう！」

2人は握手をした後、別れた。

両組織の軍が別れ、ジオンの艦隊がサイド3宙域に入った頃、ユウキは自分の所属する組織の拠点に戻っていた。

時代は確かに、「史実」から曲がり始める。

- 第7話 -

- 宇宙世紀0077年 -

サイド2ハツテとサイド5リアで、同時テロが起きた。

事件の内容はそれぞれのサイドの独立運動していたグループが示し合わせ、コロニーにいた地球連邦軍のコロニー駐在軍を襲撃したのだった。

これに対して地球連邦政府は事件の早期解決を考え、軍を派遣。これに慌てたのは武装テロをした各グループだった。

それぞれは支援していた組織の指示に従い、サイド4付近のデブリ帯を宇宙港にあった地球連邦軍の宇宙船等を奪って脱出。

しかし、一部の交戦派が地球連邦の派遣した軍に向かって攻撃を開始した。

最初は奇襲の形で襲撃した交戦派の部隊が地球連邦軍の巡洋艦数隻、撃沈したが混乱から治った地球連邦軍に次々と逆に撃沈されて言った。

そして残り1隻になった交戦派が密かに連れて来ていた人質を盾に、攻撃の中止を求めた。

しかし、此処で衝撃が走ったのだ。

地球連邦軍は攻撃の中止を拒否、拒否所か何も答えずにテログループが乗る宇宙船を人質と共に撃沈したのだ。

これに対して地球連邦政府は攻撃の中止を求められた事を否定、更に地球連邦政府は人質がいた事に関しては確認が取れてないと明言、仮にいたとしても尊い必要な犠牲、と発表した。

しかし、後日に新事実が判明。

当時のテログループの掃討を命じられた艦隊の将官が、地球連邦政府の高官とのやりとりを世間に発表。

その内容は将官が高官に対して必死に攻撃中止の許可を嘆願、しかし高官はそれを否定した所かコロナー住民の人質を「宇宙ゴミ」と発言。

この発表に地球連邦に、特に政府に対して宇宙移民者の抗議が発生。だが地球連邦は黙秘を続け、宇宙居住者と地球連邦の溝が深まる一連となった。

「大変な事態になりましたな」

ユウキがポツリと呟く。

彼以外にも何人かの姿が確認出来る。

彼等はサイド4近くのデブリ帯に拠点を構え、その拠点の会議室で話し合っていた。

拠点は廃棄された資源採掘基地を改修・改装したものだが、機能や防衛力は高い。

更に周りはデブリがある為、地球連邦軍に攻められたとしても大軍の侵攻を阻む、謂わば天然の要塞の様な場所になっているのだ。

彼等は先のテログループと地球連邦の事件に関して話し合っていた。

「閣下、直ちに我々も地球連邦に攻撃を開始しよう！」

この組織で兵士達を纏める、ラトキア・ホルメと言う人物だ。

「まあ、待てラトキア。メイビン、情報は？」

閣下と呼ばれたカロウイン・シツクが聞く。

メイビンと呼ばれたメイビン・スウは立ち上がって報告する。

「はい。我々が調べた結果では今回の交戦派は回収したサイド2側の様でした。これにこり、サイド2側で回収出来たのは本来の40%程度で、サイド5側は多少は交戦派についていった分を引いて80%が回収出来た模様です」

報告が終わるとメイビンは席についた。
続いて別の男性が立ち上がる。

「報告します！この度の回収で戦力が人員面で3割、兵器等の物資面では6割強の増加となりました。」

組織の兵器等の物資面を束ねるケビン・ダックが報告を終える。
するとまたメイビンが立ち上がる。

「それに関しての報告を致します。交渉役のユウキ殿のおかげで、我々が得た他組織と交渉が成功し、組織に続々と集結しています。我々に参加しない組織に関しては、多少の資金・資源を提供する条件に用意した拠点に隠れて貰っています。詳しい事は交渉役のユウキ殿から願います」

ラトキアが頭を下げて席に座ると、ユウキが立ち上がり報告を始める。

「では私から報告します。この度、回収出来たサイド2・5の組織は以前から資金面等で援助をしていた為、比較的信用されていた為に無事、引き込みが出来ました。又、同サイドや他サイドの組織とも交渉は続けており、比率で言えば引き込んだ組織の方が多いです。ただ、引き込み無かった組織等に関しては、今回見たいな事になる懸念、更に今回の件で地球連邦の取り締まりが厳しくなった為、多少の融通をして我々が用意した拠点に移って貰いました。融通の内容はケビン殿とジョージ殿にお願いします」

「はい。物資面では各拠点に以前から我々が得た情報を元に生産した地球連邦軍と同じ宇宙戦闘機を用意した150機、簡易武装を施した民間の輸送船に偽装した輸送船を3つ、他には銃や弾薬等、以上を支援物資として提供してます。これはジオンから得た兵器類だけ残す為の、言わばリサイクル的な処分も兼ねてと、既に開発・生産がこの兵器に統一し始めたからであり、対して損はしていません」

「では次に、各拠点には援助資金として金塊を主に、約3億円分を提供してあります。これだけあれば彼等とて満足に行く活動は可能でしょう。」

ケビンに続いて、組織の財政を担当しているジョージ・ハガが報告する。

「お二方が終わりましたので、また私が報告します。各拠点はあくまでも我々の目眩まし程度になれば…と言った程度です。その為、地球連邦の宇宙拠点「ルナツー」付近に用意した拠点は多いです。彼等の大半には合図あるまで行動を待つて貰う約束は取り付けました。ただ、腕が信頼出来そうな組織に関しては地球連邦の地球、月、地球、ルナツー、ルナツー、コロニー…等を通して、地球連邦の

輸送船を襲撃して貰う約束を取り付けました」

「次は私が」

ユウキの報告の後、組織のNo.2とも言つべきロバート・ロングが立ち上がる。

「この妨害が上手く行けば、地球連邦の各施設は物資等の補給が上手くは行き渡らない為、残り少ない我々とジオンには大変、貴重な時間を稼げると共に戦力低下も狙えます。又、襲撃を担当する組織には連邦軍とは戦わない様に厳命させる様に約束を取り付けたので、破ったりされない限りは大丈夫かと。それと来年の10月に、ジオンと最終確認を行う為、デブリ帯のサイド3方面口で落ち合う予定です」

「他に報告は？」

カロウインが皆に問う。

その後は報告は無かったが交戦を主張する者もいたり騒がしかったが、結局は予定通りと話が決まった。

- 第8話 -

- 宇宙世紀0078年10月 -

前年から地球やコロニーでは事件が相次いで行っていた。

まず、宇宙では地球から月やコロニー、ルナツーに向けた物資を積んだ輸送船が次々と襲われ、何処かに姿を消す事件が起きていた。更に地球では過激テロ組織が、爆破テロや銃で襲撃する事件が勃発していた。

そんな中、以前にジオンと密会したエリアで、再び密会を行う組織がいた。

片方はジオン公国から派遣された密使団。

もう片方はカロウインが率いる反連邦組織「ゴースト」の偽装船だ。

「お久しぶりですな、コンスコン少将。」

ユウキがコンスコンに挨拶する。

「何だ、もうそこまで調べたのか？」

コンスコンがそんなボヤき共取れる事を言う。

「いえいえ、先程、入り口で兵士の方が少将と読んでいたので、分かっただけですよ」

「成る程な。…後で給料カットしてやる」

そんなコンスコンに、いや兵士に多少の同情をしながら苦笑しつつ座るユウキ。

「それで…いよいよ、予定が？」

ユウキがコンスコンに聞く。

「うむ、来年の1月3日に行動を開始する予定だ。」

コンスコンがやや緊張した様子に答える。

「成る程…では我々もそれに合わせて行動を開始します」

「うむ。我々ジオンは予定では最初に月、次にルウムに…と行く予定だ。」

「私達は以前から申し立てた通り、最初に、サイド4、続いてサイド1に行動をします」

「分かった、…兼ねてから領域は決めた通りで良いんだな？」

「ええ、私達は独立が目的ですから。独立を果たした後は連邦とは停戦する予定ですが、間違ってもジオンに恩を仇で返す真似はしませんよ」

「分かっている。だからこそこうして確認をしながら、改めて約定を確実な物にしようとしているのだ」

コンスコンは自分に用意されていたコーヒーを飲む。

「そうですね。それに私達は数が少ないのでもしかしたら…」

「むう…」

コンスコンがユウキの言葉に呻く。

ジオン公国はユウキが所属する反連邦組織「ゴースト」の全体を把握していないのだ。

所詮は小さな抵抗組織にしかないだろうから、その人数だって微々たる物の筈である。

所がゴーストがジオンに新兵器の生産許可の許可に払った金額は総額数十億は行く。

これを踏まえて考えてると、その資金力は相当な物と考えられ、一時はジオン内で侵攻してその資金・資源を奪おうと意見が上がった程だ。

だがコンスコンやドズルと言った、ゴーストの組織の一部しか見ていない者から反対の声が上がったのだ。

たった一部…。

そのたった一部だけでジオン公国軍に所属するコンスコン・ドズルは、ゴーストの力強さを感じたのだ。

正規の軍さながらの艦隊の並べや動き、組織兵の無駄の無い動きを見れば、如何に彼等が自分達ジオン公国軍と差が無い動き…否、未だにジオンは軍の人数を予定よりやや少ないのだ。

正確には数は揃っているが、艦数等の兵器の数が生産が追い付かないのだ。

「…我々は予定通り、月、そして次に君らの組織が欲しいサイド5とサイド1以外に侵攻する。」

「サイド1…ルウムはやはり？」

「うむ、連邦との決戦の場になろう」

ユウキの疑問にコンスコンは答える。

「しかし宜しいので？」

「何がだ？」

ユウキの別の疑問にコンスコンは分からないとばかりに首を少しかしげる。

「コンスコン少将がお話して下さったのは、機密事項では？」

ユウキは素直に疑問を聞く。

「…ドズル閣下と話て決めたのだ。貴君らには隠さずに話す事をな」

「それは…信頼して頂き、大変ありがたいですな！」

コンスコンの言葉にユウキが破顔した笑顔をコンスコンに向ける。

「…っと、そろそろ時間のようです、少将」

「うむ。…名残惜しいが我々も引き上げよう」

「はい、それでは近い内に会える事を！」

「うむ、我々も…ジオンも待っている！」

その後は両艦隊はエリアから各々の本拠へと戻って行った。

反攻の開幕まで、残り3ヶ月を既に切っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6463u/>

-歴史の改編者-

2011年9月24日20時56分発行